

# 古墳時代上毛野における 青銅製品の系譜

The Lineage of Bronze Products in Kamitsukeno during the Kofun Period

土生田純之

HABUTA Yoshiyuki

はじめに

①分析資料出土古墳の概観

②角閃石安山岩削り石積み石室をもつ古墳

③上毛野出土外来系青銅器の歴史的意義

## 【論文要旨】

西毛地域の古墳出土品を鉛同位体比分析した。分析した古墳は一部に5世紀後半（井出二子山古墳・原材料は朝鮮半島産）や6世紀前半のものも含むが大半は6世紀後半～7世紀初頭に属する。さらにその中で角閃石安山岩削り石積み石室を内蔵する古墳が多い。この石室は綿貫観音山古墳や総社二子山古墳を代表とする西毛首長連合を象徴する墓制と考えられている。特に観音山古墳からは中国北朝の北齊製と考えられている銅製水瓶や中国系の鉄冑などをはじめ、新羅製品も多い。新羅製品は他の角閃石安山岩削り石積み石室出土品にも認められている。かつて倭は百済と良好な関係を結ぶ一方、新羅とは常に敵対関係にあったと考えられてきたため、学界ではこの一見矛盾する事実の解釈に苦しんできたが、筆者は「新羅調」「任那調」に由来するものと考えた。特に今回分析に供した小泉長塚1号墳の出土品中に中国華北産原料を用いた金銅製冠があったが、新羅は当該期の倭同様、銅の原料が少なく何度も遣使した北朝から何らかの形で入手した原材料を用いて制作したものを「新羅調」等として倭にもたらしたものと考えた。もちろん直接西毛の豪族連合にもたらしたのではなく、倭王権にもたらされたものが再分配されて西毛の地にもたらされたものと考えている。西毛は朝鮮半島での活動や対「蝦夷」戦に重要な役割を演じ、そのことを倭王権が高く評価していたことは『日本書紀』の記事からも窺える。こうして6世紀後半～7世紀初頭における西毛の角閃石安山岩削り石積み石室出土品から、当該期の国際情勢を窺うことができるのである。

なお、井出二子山古墳出土品に使用された銅が朝鮮半島産である可能性が高いことは、当該期の状況（加耶や百済との交流を中心とする）から見て矛盾しないものである。

【キーワード】古墳、西毛地域、鉛同位体比分析、朝鮮半島、百済、新羅、加耶

## はじめに

今日の群馬県にほぼ相当する上毛野は、古墳時代において全長210mの規模を誇る太田天神山古墳（前方後円墳）をはじめとする多くの大型古墳や三ツ寺Ⅰ遺跡などの豪族居館などから、当時東国随一の勢力を維持していた事実を今に示してくれている。

副葬品の中にも優品の占める比率が多く、中でも朝鮮半島をはじめとする海外製品の多いことでも注目される。これらは、主として考古学的な観点—型式学に基づく比較研究—からその系譜を求めたものであるが、以下のような問題を内包しており、厳密に製作地を断言できるものではない。つまり、①列島における模倣品である場合。この場合は綿密な観察によっておおむね製作地の推定に対する不安は除去されているが、なお一抹の不安が残ることは否めない（三角縁神獣鏡の生産地を巡る論争を見れば了解されよう）。②次に例えば朝鮮半島製といってもそのいずれの地域かという点について。これについても近年における考古学の発展は目覚ましく、百濟、新羅、高句麗など具体的に的を絞った製作地の推定が可能となっている。

以上のように今日の考古学の発展は、かつての概括的な理解にとどまらず詳細な観察に基づいた具体的なものである。しかし、上述の内容とは全く異なった分析によって、つまり人間の目を通した観察ではなく自然科学的な分析に基づいて製品の原材料産地推定を行う方法が開発され発展が続いている。このような客観的な方法と人による観察を併せることによってその信憑性を増すことができるものと考えているのである。

今回用いる分析は鉛同位体比による分析であるが、結果は筆者と共同研究を実施した国立歴史民俗博物館の齋藤努教授による。分析結果の詳細は齋藤の別稿によらねたい。小稿では齋藤の分析結果を踏まえ、その歴史的意義及び背景について考察する。

さて、分析対象としては、①微量でしかも錆でも問題がないが、すでに文化財等に指定された資料を分析に供することが不可能である。②出土時の状態をとどめていること—つまり自然科学的保存処置を施す前の状態にあること、などの条件から制約があり、提示されたすべての出土品を扱うことはできなかった。その中で分析した資料は齋藤論文に掲載された別表の通りであるが、5世紀前半の稲荷塚古墳、5世紀第3四半期の井出二子山古墳、さらに神田古墳群K-5号墳が7世紀に降下する以外、すべて6世紀に属する。ただし、その中であってお榛名古墳は6世紀前半の築造であり比較的早い段階の横穴式石室であるが、その他はおおよそ6世紀後半に属する。注目すべき成果は以下の2点に絞られるであろう。

- ①多くの製品が朝鮮半島の原料を用いた可能性があること。この点は列島社会において日本産原料が用いられ始める時期が、6世紀末頃に遡上することも分析結果から見て理論上はありうるが、ごくわずかな量に過ぎず、本格的に始動するのは8世紀に入ってからのことである。したがって順当な結果であるといえよう。特に5世紀中葉～後半の井出二子山古墳と6世紀前半のお榛名古墳は、当該期において当地に多くの渡来人が存在した事実から見て納得できるものである。今日話題となっている金井東裏遺跡出土の甲冑着装人物が、形質人類学的分析及びストロンチウム同位体比分析から、朝鮮半島系渡来人の系譜に属する〔田中 2015〕ということも、

これらの分析結果と符合するものと見てよいであろう。ただし、朝鮮半島、特に南部においては、良好な銅鉱が早くから開発されていたという証明は未だなされていない。この点については今後の課題となろう。

- ②次に小泉長塚1号墳や萩原塚古墳の資料中に中国華北産の原材料を用いたものがあったことが注目される。

以下、特に上記②を中心に考察するが、その前に分析した各資料出土古墳について概観しておこう。

## ①……………分析資料出土古墳の概観

分析に供した資料の出土古墳は、高崎市、藤岡市、玉村町の3市町にまたがる。以下ではまず各古墳を概観する。また分析資料についてもごく簡単に触れるが、多くは細片で特定できないものがあることを断っておきたい。なお、分析結果はその大半がB領域に入るものであるが、一部にA領域に入るものがあり、中国華北産と考えられる。この歴史的意義については、後述したい。

### 1) 高崎市所在古墳

**井出二子山古墳** 本墳は二重周溝を有する前方後円墳で、墳丘全長108mを測る。内堀のくびれ部から後円部にかけて左右対称の位置に各々2基の中島を有する。5世紀中葉～後半の築造である。当地ではその後指呼の位置に、保渡田八幡塚古墳(5世紀後半～末・全長96m)、保渡田薬師塚古墳(6世紀初頭・105m)と続く保渡田3古墳の嚆矢と位置づけられる。築造規格の同一性、位置関係等からこれら3古墳が三ツ寺I遺跡を本拠とした勢力の代々の首長墓であることは明白である。3古墳中唯一二子山古墳にのみ墳丘周囲(前方部正面と北側側面の外方)に後続する(5世紀後半～6世紀)小規模古墳13基をはじめ小石塚、土坑墓、埴輪円筒棺が築造されている(北畑遺跡、保渡田Ⅶ遺跡)。八幡塚、薬師塚古墳とは異なり、当地の開発を主導した被葬者の奥津城として、つまり始祖墓としての特別な存在であったことが推測される(図1)。

本墳はそれまで未開拓であった高燥の

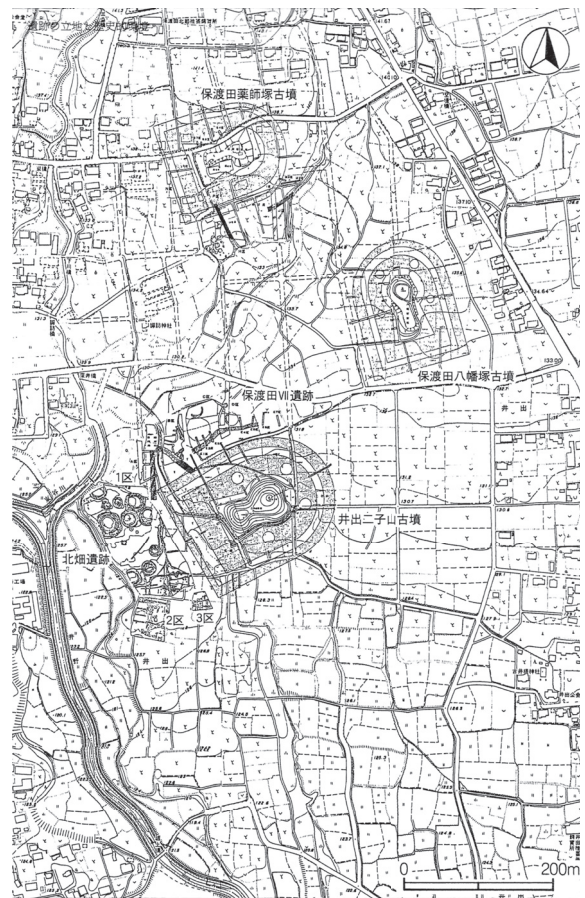


図1 保渡田古墳群図(群馬町教育委員会 2003)

地を開発に導いた卓越した指導者として、長く人々の記憶に残ったものと考えてよい。ただし、こうした開発に多くの渡来人と彼らの技術が貢献したことを忘れてはならない。

分析した資料は金銅製冠の他、鉄地金銅板銀被銀他である。これらの一部には、朝鮮半島嶺南地方の分析結果に類似するものがある。

**お榛名古墳（お春名古墳）** 西側壁から派生した張出部のある特異な横穴式石室を有することで知られる。周堀を有する直径25mの低い基壇上に、直径15mの円丘をのせた円墳である。葺石と埴輪を有する。6世紀前半～中葉の築造であるが、7世紀前半まで数度の追葬が行われている。

分析した資料には耳環の他に刀装金具や同目釘穴（鳩目釘）装具などがある。これらのうち目釘穴装具は確実に朝鮮半島系原料を用いたものであるが、他も朝鮮半島産の可能性のあるものが含まれる。

**諸口Ⅲ号墳** 直径約40mを測る大型の円墳である。墳丘は火砕流による小丘を削り出して整形し、その上に盛り土をして築盛している。横穴式石室を内蔵するが、崩壊が著しい。両袖形であると思われる。埴輪から見る築造年代は6世紀後半と思われる。

分析資料は刀鐔、金銅装筒金具、大刀足金具、歩揺付飾金具、鈴などである。

## 2) 藤岡市所在古墳

**稲荷塚古墳** 21.6×20.3mを測る円墳である。葺石の存在は確認されたが埴輪は未確認である。内部主体は粘土槨と推測され、5世紀前半の築造と思われる。副葬品には振文鏡や滑石製模造品があり前期的様相を残す中期初頭の古墳と考えられる。

分析した資料は振文鏡である。

**堀ノ内BK-1号墳** 調査時点ではすでに相当削平されていたが、『上毛古墳総覧』によれば直径およそ32mの円墳である。しかし調査の結果、直径21mの円墳であることが判明した。横穴式石室を内蔵し、開口側にのみ葺石を施している。6世紀後半の築造である。

分析資料は耳環である。

**皇子塚古墳** 直径31mを測る円墳で、前面に葺石を施す。石室は複室の両袖形石室で玄室のみきりいし截石切組積みにより、他は自然石乱石積みである。遺物は豊富で金銅製馬具をはじめ優品が多い。6世紀後半の、当地における有力者の奥津城と考えられる。

分析した資料は耳環の他、馬具飾金具、蟹目釘などである。

**東平井古墳群時沢支群K-5号墳** 東平井古墳群は、『上毛古墳総覧』によれば当時300基近くが残存していたという。今日においても数多くの古墳を数えることができる。古墳群は分布状況に基づいて、鮎川上流域から川破支群、塚間支群、飛石支群、時沢支群の4群に区分されている。本墳は破壊が著しく、石室は根石のみが残存していた。本古墳群は6世紀後半から7世紀にかけて築造されたものである。

分析資料は耳環である。

**萩原塚古墳** 墳丘全長40mを測る前方後円墳である。後円部に両袖形の横穴式石室を内蔵する。墳丘の前面には葺石を施す。また墳丘には数種の形象埴輪が配置され、特に円筒埴輪は墳丘を圍繞していた。石室は珪岩と片岩の河原石を用いているが、大半は片岩である。石室奥壁が後円部の中

央に相当する位置に配置されている。出土遺物には優品が多く、銀製圭頭大刀の柄頭をはじめ、甲小札や琥珀玉・トンボ玉などがある。築造年代は6世紀後半に求められる。分析結果は、萩原塚古墳の資料の中に中国華北産と考えられる資料が4点存在するが、この点については章を改めて考察したい。

分析資料は刀足金具、鈴、舌などである。

### 3) 玉村町所在古墳

**小泉大塚越3号墳** 墳丘全長55m（墳丘中軸線の後円部側に造り出しが取りつく特異な形態で、この造り出しを除けば全長46mを測る）、墳丘の周囲には周掘を巡らせている。両袖形の横穴式石室を後円部に配置するが、開口部は西南方向に向いている。しかし、墳丘の主軸が東西にあるため、開口部はおおむね主軸ラインの後円部側に位置する。造り出しの位置とともに、特異な形態といえよう。墳丘には葺石を施す。また墳丘の周囲には幅5～6mの周掘を巡らせている。石室は破壊が激しく2段を残すのみであったが、いわゆる角閃石安山岩削り石積み石室である。平面形態は奥壁側が最も幅広く、狭い開口部から徐々に広がる。袖部は側壁（袖石）が若干内部に突出する程度で、主として敷居石によって羨道と玄室を区別している。副葬品は豊富で、しかも優品が多い。金銅製単鳳環頭大刀柄頭をはじめ武器・馬具等の他、金銅製冠の出土が注目される。6世紀後半の築造である。

分析した資料は金銅製冠の歩揺である。

**小泉長塚1号墳** 周囲に家屋が建ち正確な墳形をつまびらかにできないが、以下に述べるように小泉大塚越3号墳同様角閃石安山岩削り石積み石室であること、また石室開口部外側に造り出し状に突出していることなどから小泉大塚越3号墳に類似した形態、つまり前方後円墳の可能性が強く考えられる。ただし、石室の平面形態は大塚越3号墳とは異なり玄室がやや胴張り形を呈する。墳丘には二段築造の上段のみ葺石を施している。本墳も副葬品には優品が多くあったものと思われる。金銅製単鳳環頭大刀柄頭、金銅製冠が出土しており、小泉大塚越3号墳との類似性が目立つ。特に長塚1号墳出土品の分析によれば、2点が中国産の可能性が強いことに留意したい。小泉大塚越3号墳同様6世紀後半の築造であるが（後述するように、本墳の石室は玄室平面がやや胴張りを呈しており、このことを重視すれば小泉大塚越3号墳よりも若干後出する年代、6世紀末ないし7世紀初頭が考えられる）、両者の前後関係については現状では確定できない。

分析した資料は小泉大塚越3号墳同様金銅製冠であるが、その中に既述の通り中国華北産原料を用いた資料が含まれることに注目したい。

## ②……………角閃石安山岩削り石積み石室をもつ古墳

上述したところで明らかなように分析資料中、中国華北産銅を用いた資料が存在した。それらを出土した古墳は藤岡市萩原塚古墳と玉村町小泉長塚1号墳である。このうち小泉長塚1号墳は西毛における6世紀後半の特徴的な石室、角閃石安山岩削り石積み石室を共有する一連の古墳、すなわち被葬者達の連合体制が想起される。角閃石安山岩削り石積み石室は、尾崎喜左雄によって注目さ

れた石室〔尾崎 1966〕で、旧利根川流域に点在する6世紀後半～7世紀初頭の築造にかかる。角閃石安山岩の裏面を除く5面を丁寧に削り（一部には切組の仕様も認められる）、当地で「<sup>きりいし</sup>截石」と呼称・記述される切石石室に近い加工度を持つ。しかし、詳細に観察すると石材の角がなお丸みを残しており、その直前段階に相当するものである（<sup>(1)</sup>図2）。これは高崎市の綿貫観音山古墳（全長97.5mの前方後円墳）、前橋市総社二子山古墳－後円部石室－（前方後円墳・現状の全長90m、当初は約100mか）などを頂点とする首長連合（この他、右島和夫は前橋市天川二子山古墳－後出－が角閃石安山岩削り石積み石室であることを強く推測している）〔右島 1993〕であり、これら古墳から出土した遺物の中には金銅製冠をはじめ新羅系遺物が多い〔土生田 2009〕。この角閃石安山岩削り石積み石室を

内包する古墳として顕著な副葬品を出土したものに、高崎市綿貫観音山古墳をはじめ、前橋市山王二子山（金冠塚）古墳（全長56mの前方後円墳）、前橋市不二山古墳（全長50mの前方後円墳）、そして玉村町小泉大塚越3号墳、同小泉長塚1号墳がある。他に角閃石安山岩削り石積み石室を内包する古墳には、玉村町田芝根村1号墳（全長54mの前方後円墳）、前橋市桂萱大塚古墳（前方後円墳・全長57m）、同長山古墳（前方後円墳・全長50m）、同大屋敷古墳（前方後円墳・全長60m）、同塩原塚古墳（円墳・直径14m）、伊勢崎市清音1号墳（円墳・直径24m）、同鶴巻古墳（円墳・直径34m）、玉村町萩塚古墳（円墳・直径30m以上）などがある。なお、上掲した古墳のうち桂萱大塚古墳から大屋敷古墳までの3基は同じ広瀬古墳群に所属しており、天川二子山古墳（前方後円墳・全長104m）も広瀬古墳群にある。したがって内部主体の不明な天川二子山古墳を除く広瀬古墳群における当該期の前方後円墳は、いずれも角閃石安山岩削り石積み石室であり、先に触れた右島の推測はこうした事実から導きだされたものであろう。このように考えるなら、その蓋然性は極めて高いものと思われる。

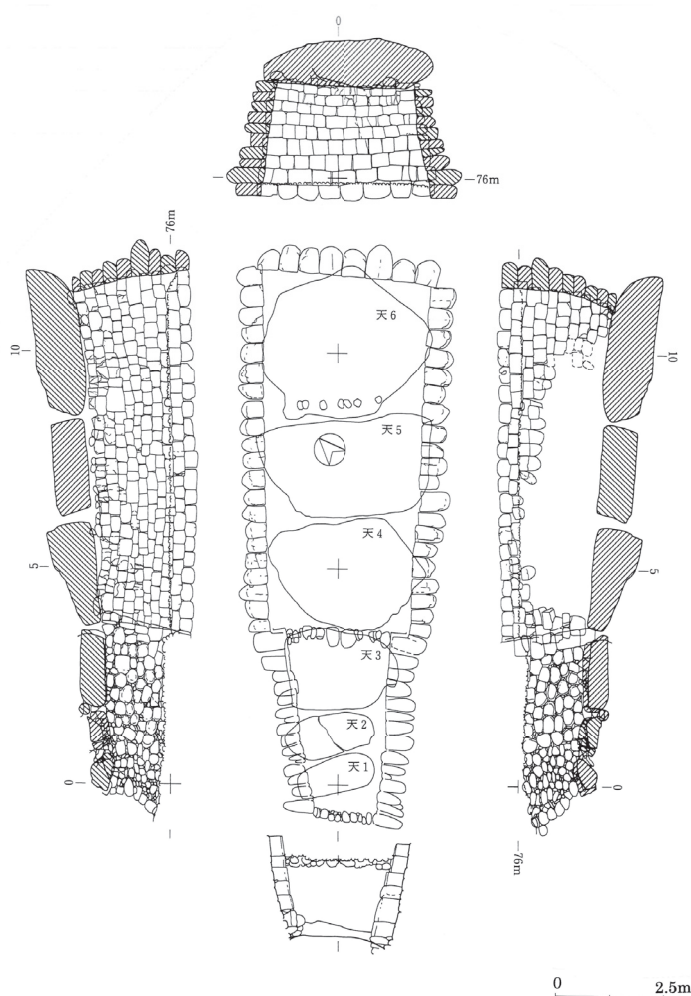


図2 角閃石安山岩削り石積み石室（綿貫観音山古墳）  
（群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）

ところで、角閃石安山岩削り石積み石室は右島和夫による詳細な分析が加えられている〔右島 1993〕。以下では右島の論考を基礎として、当該石室を巡る諸特徴を簡略にまとめておく。まず当該石室は平面形から①矩形プラン式石室と②胴張りプラン式の2類に分けられ、前者はさらに整然とした壁面構成となっている観音山古墳類型（観音山型）と観音山型ほどには整っていない総社二子山古墳類型（総社二子山型）に細分されている。観音山型は他に不二山古墳、小泉大塚越3号墳、鶴巻古墳などが、総社二子山型は塩原塚古墳、山王二子山古墳、桂萱大塚古墳などがあげられている。一方、②の例としては小泉長塚1号墳の他に清音1号墳や萩塚古墳などがあげられる。出現は①が早く、6世紀後半に、②はおおむね7世紀初頭に出現したものと考えられている。これとも絡み①は主として前方後円墳に採用されるのに対し（塩原塚古墳や鶴巻古墳などの比較的規模の大きい円墳にも採用されている）、②は比較的大型の円墳に限定され、現在までのところ前方後円墳には認められていない。

さて、綿貫観音山古墳と総社二子山古墳は墳丘規模が他を圧しており、横穴式石室の規模も群を抜いている。ただし、総社二子山古墳は早くから開口しており、今日副葬品はほとんど残っていない。本墳は後円部に所在する角閃石安山岩削り石積み石室の他、前方部にも輝石安山岩の転石を用いた石室がある。これは規模が後円部の石室よりも小さく、明らかにそれよりも劣位にある。しかし、ここから江戸時代後期に発見された頭椎大刀の模写図が残されている。それによると観音山古墳出土の金銀装頭椎大刀に酷似している。墳丘や石室の規模とともにこうしたことから、総社二子山古墳の被葬者が綿貫観音山古墳の被葬者とともに角閃石安山岩削り石積み石室を共有する連合体の主導的位置にあったことは間違いないと思われる（既述のように天川二子山古墳を含め、右島はこれら3古墳の被葬者を角閃石安山岩削り石積み石室を共有する連合の主導者とみている）〔右島 1993〕。

この他、高崎市石原稲荷山古墳（直径約30mの円墳）も凝灰岩の削石（市史は「凝灰岩切石積両袖型石室」とする）を用いた横穴式石室を主体部に採用しており、おおむね上記諸古墳と同様の技術的背景が考えられる。そこで、以下ではまず角閃石安山岩削り石積み石室を内蔵する古墳（石原稲荷山古墳を含む）のうち、上述したように顕著な副葬品を出土した古墳の概要について述べる。そして、これらの石室出土品の中で全体に共通する特徴的な遺物相を指摘した上で、章を改めてその歴史的意義について考察したい。

**綿貫観音山古墳** 5世紀前半頃の築造と推定される普賢寺裏古墳（70m）の他に、岩鼻二子山古墳（115m）、不動山古墳（94m）と続いた高崎市綿貫地区における首長墓（前方後円墳）系譜の最終末に築造された古墳である。既述のように全長97mを測る。二段築盛であるが、葺石がないこともあってか傾斜はなだらかである。墳丘には多くの埴輪が配置されているが、特に形象埴輪は次の2か所に集中している。まず墳頂部に家・器財・鶏形埴輪を配置し、人物埴輪は石室開口部が位置する中段平坦面に配列されている。副葬品には多くの優品が含まれており注目されているが、中でも銀地鍍金空玉、金銅装頭椎大刀、振り環頭大刀、三壘環頭大刀、鉄鉾、金銅装心葉形杏葉、金銅装花卉形鈴付雲珠、金銅装歩揺付飾金具、金銅装鈴付大帯など朝鮮半島に由来する外来系文物が多い。また鏡には半肉刻獣帯鏡と仿製二神六獣鏡があるが、特に前者は百濟武寧王陵出土鏡と同型鏡であることが広く知られている。中でも銅製水瓶や鉄冑（頂部突起付）は、中国に由来するも

のである（これらの出土品については後述する）。

**山王二子山（金冠塚）古墳** 二段築盛の前方後円墳で葺石を施す。墳丘には円筒埴輪を巡らせているが、埴頂部には形象埴輪を配列していた。特に後円部埴頂部から須恵器甕の破片が出土した。副葬品は金銅装大帯、衝角付冑、金銅製大刀、鉄地金銅張馬具など豊富であるが、特に金銅製冠は、花形の立ち飾りが5本付き、それらを格子状に帯状の板で繋ぎ止めている。いわゆる出字形冠と呼ばれるもので、明瞭に新羅製品と断定できるものである。これとともに既述の金銅装大帯も渡来系文物と認められる。

**石原稲荷山古墳** 本墳は既述の通り凝灰岩を用いた6世紀末の削り石積み石室であり、厳密には角閃石安山岩削り石積み石室とは異なる。しかし、築造年代や築造地は角閃石安山岩削り石積み石室と重なり同様の技術背景が考えられることから、以下に概要を述べておく。

墳丘には葺石と円筒・形象埴輪を施している。葺石、埴輪を用いる古墳の最終段階と思われる。副葬品は豊富で、石室内から挂甲小札、刀子、鉄鏃、ガラス小玉・勾玉、鉄地金銅張・金銅装馬具、耳環、紡錘車、金糸、銅鏡の他、各種須恵器・土師器が出土した。また石室前庭部から各種の須恵器・土師器が出土している。群馬県下における7世紀の横穴式古墳で盛行する「前庭部の儀礼」の早い段階のものと評価できる。金糸、銅鏡など朝鮮半島の渡来系文物を含む。

以上の他に、今回資料分析した小泉大塚越3号墳及び小泉長塚1号墳からも既述の通り朝鮮半島系の冠が出土している。

既述したところによって、角閃石安山岩削り石積み石室を有する古墳の中には、朝鮮半島系文物を埋納したものが目立つことを確認した。しかし、先に述べたように小泉長塚1号墳出土冠の原材料は中国華北産であった。そこで、次にこれら角閃石安山岩削り石積み石室から朝鮮半島系文物が多く出土すること、さらには中国華北産原料を用いたものが見られることの歴史的背景について考究したい。

### ③……………上毛野出土外来系青銅器の歴史的意義

同位体比分析結果のうち第一に注目されるのは、角閃石安山岩削り石積み石室を主体部とする古墳から出土した遺物の中に朝鮮半島製、それも新羅製・新羅系遺物の多いことである。今回の分析によって朝鮮半島の原材料を用いた井出二子山古墳のように、考古学による分析結果とも併せて見た場合、当該地における青銅器の中には加耶に系譜を求めることができるものも多く含まれている。しかし、これは5世紀中葉～6世紀前半のことである。加耶は6世紀中葉には滅亡しており、分析対象となった資料を出土した古墳の多くは、6世紀後半を中心とする時期の築造である。従来当該期（6世紀後半～7世紀初頭）の新羅とは敵対関係にあることから、朝鮮半島製・系の文物はその多くが百濟製および百濟系であると考えられることが多かった。しかし、近年では遺物の詳細にわたる観察によって新羅製・新羅系の遺物が存外に多いことが注目されるようになってきている〔高田2014〕。

次に各古墳出土資料分析結果のうち、特に注目されるものについて概観した上で若干の考察を行う。なお、分析した資料の大半は鉛同位体比図のB領域＝中国華中・華南産に含まれ、他の一部は

朝鮮半島産の原料である。今日までのところ日本産原料が用いられるのは7世紀中葉以後であり、可能性を考慮しても6世紀末までしか遡上しない。したがって、古墳時代における日本列島での青銅製品の製作は、列島以外の原材料を用いるしかなかった。また朝鮮半島においても良好かつ埋蔵量が豊富な銅鉱は確認されていない。このため日本とさほど変わらない状況にあったものと考えられるのであり、多くの製品は中国華中・華南産の青銅（中には銅鐸のように既存の製品を鋳なおしたのもあったと思われる）を用いて製作されたものと思われる。

まず井出二子山古墳出土品の中には今回分析した冠など金銅製品が多いが、このことは後続する保渡田八幡塚古墳にも共通する。当該地は既述のように5世紀中葉～6世紀初頭にかけて井出二子山古墳→保渡田八幡塚古墳→薬師塚古墳と3基の大型前方後円墳が継続して築造された。近在には古墳群の被葬者が生前暮らしていたと見てよい豪族居館遺跡、三ツ寺Ⅰ遺跡がある。朝鮮半島との密接な関係を示すものとして上述の出土品の他、彼らの支配領域と見られる近在地には下芝谷古墳（5世紀後半）の存在することが注目される。本墳は二段築盛の方墳であるが、下段は一辺約20mあり45度の急傾斜で上面に至る。上段は一辺8.5mであるが、転石を積み上げた積石塚の形状を示している。しかも副葬品中には馬具、甲冑類等の他に加耶製の金銅製飾履があり注目される。西毛では5世紀中葉～6世紀初頭にかけて朝鮮半島出身者と思われる渡来人の墳墓として積石塚が採用されている（墳墓における渡来人としての明示機能）[土生田 2006]。本墳は他の積石塚に比して優品が多いのみならず、他の積石塚には見られない埴輪を有することや墳丘規模が大きいことも特徴的である。したがって本墳の被葬者は、渡来人の指導者と思われる。保渡田古墳群の被葬者はこのようなある程度組織化された渡来人集団のもたらした新技術によって、それまで未開拓であった当該地の開発に成功したものと思われる。したがって、保渡田古墳群出土品中に朝鮮半島系文物が含まれること、また今回分析した井出二子山古墳出土資料の中に朝鮮半島嶺南地方（慶尚道地方）の分析結果に類似するものが存在することは、むしろ当然の結果といえるのである。

次に中国産原料を用いた小泉長塚1号墳出土の金銅製冠について考察したい。既述の通り本墳は6世紀後半～7世紀初頭にかけて築造された角閃石安山岩削り石積み石室を内蔵する。この種の石室は、上述したように綿貫観音山古墳と総社二子山古墳そして天川二子山古墳の被葬者を盟主とする西毛連合の象徴としての機能を果たしていたものと考えられる。この角閃石安山岩削り石積み石室を内蔵する古墳からは前述の通り、新羅製遺物が出土することが注目される。

以前これらの遺物を「新羅調」「任那調」に相当するものと推測した[土生田 2009]が、その折には中国華北産原料を使用しているものがあるとは考えていなかった。しかし、6世紀後半の新羅は552年に漢城地区を奪取、初めて半島の西海岸に達した。時あたかも6世紀前半の法興王代（仏教を受容したことが名称の由来となっている）を経て、本格的に古代国家建設に邁進した真興王代に相当する。こうして新羅は564年北朝の北斉に朝貢、次いで568年には南朝の陳と、南北朝のいずれにも朝貢を始めるのである。その後572年に北斉に、また570、572年には南朝の陳に朝貢している。この後615年には中国統一を果たした隋に遣使し、以後頻繁に隋に代わった唐に遣使していることはよく知られている。なお、以上の遣使に遡る521年には梁に遣使しているが、百済につき従った形であり、新羅独自の遣使とはいえ新羅にとって不本意な形であったと思われる。

さて上記のように、6世紀中葉以降新羅は盛んに中国に遣使を行った。それらの一部が「新羅調」

「任那調」として倭国に再分配されたと考えることは可能であろうか。もちろんこの中には製品のみならず、原材料である中国製銅のインゴット（鑄塊）を用いた新羅製品やインゴットそのものも含まれていた可能性が考えられる。ところが、華中・華南のインゴットではなく、これまでほとんど確認されることがなかった華北産原材料を用いた冠が小泉長塚1号墳から出土している他、萩原塚古墳からの出土品にも華北産の銅が用いられていることが判明した。当然こうした背景として、既述の通り新羅の中国への朝貢によって北朝から下賜された青銅製品やインゴットの再分配が考えられるのである。このように中国から入手した製品を、倭国との外交時に再分配する事例が他にも認められることに注意を喚起したい。

このことに関して『日本書紀』には注目すべき記事が掲載されている。欽明天皇六年（545）秋九月の条に、百済が中部護德菩提等を「任那」に遣わせたが、その際「日本府」の臣や任那諸国の王たる早岐に「呉」から入手した財物を贈ったとある。「呉」は中国の江南をさし、南朝のことを意味する。当該期は梁の時代であるが、周知のように百済は親南朝路線をとっていて、梁にも幾度も遣使した。したがって多くの下賜品を得ていたものと考えられるが、その一部を外交手段として他国の王や有力者に再分配していたのである。当然、自国の有力者にも南朝から得た財物の一部を与えていたものと考えられる。百済のみならず新羅も同様に再分配を行うことによって、新羅側からすれば倭国を慰撫しようとしたものと考えられる。6世紀後半はいわゆる「倭の五王」以来、6世紀末に隋に遣使するまで中国との直接交渉が途絶えている期間にあたり、倭国にとって中国製品はきわめて魅力的であったものと思われる。もちろん、こうした事情を新羅も承知した上で中国北朝から入手した財物の一部を倭国に与えたものと思われる（なお、倭国側はこれを新羅から倭国に対する献上品と捉えていた。このように双方が解釈を全く逆の立場から捉えることは、むしろ外交上では常に認められることである）。

ただし、今回中国華北産原料と判明した小泉長塚1号墳出土の金銅製冠や萩原塚古墳出土遺物（鈴・足金物）は、原料が中国産であり製品自体が中国製ではないことに留意する必要があるだろう。しかし小泉長塚1号墳は既述のように角閃石安山岩削り石積み石室を内蔵しており、この種の石室からしばしば新羅製・系遺物が出土することが注目される。特にこの石室中の盟主墳たる高崎山観音山古墳は、新羅製品や中国北朝産と思われる遺物を出土している。そこで、次にこの中国製遺物について概観しておこう（前橋市総社二子山古墳は早くから開口して遺物の詳細は不明である）。

観音山古墳出土品で最も注目されるのは銅製水瓶と鉄冑である。水瓶は細く長い頸部と卵形の胴部に高台が付く形態である。本製品は過去の鉛同位体比分析により、中国華南産の鉛であると断じられたが、形態等考古学上の分析によれば山西省太原市所在で北齊時代における鮮卑族の貴族である庫狄廻洛（562年没）の墳墓出土品が知られている（図3）。これらのことから、華中・華南産原料を用いて華北で製造したものと思われる。また鉄冑は頂部に突起の付く縦矧板鋸留式である。このような形態は日本製冑の型式変化の中には見当たらない。本例も出土俑や壁画などから中国製冑の伝統に基づくものと見られる（図4；図示したものは後頭部がなく、後頭部下部に延びた紐状部を結んで縛るタイプである。恐らく革製を表現したものであろう。しかし、日本にはない頭頂部に突起が付く形態で、観音山古墳出土品と形状は類似する—6世紀後半の北齊墓・磁县湾漳北朝壁画墓出土—）。上述の銅製水瓶と併せ考えるなら、新羅が北齊との交流により、おそらくは下賜品として受

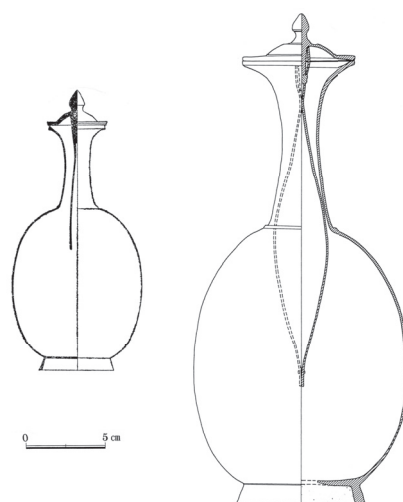


図3 古墳出土の水瓶

左：庫狄廻洛墓（王克林 1979）  
右：綿貫観音山（群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）

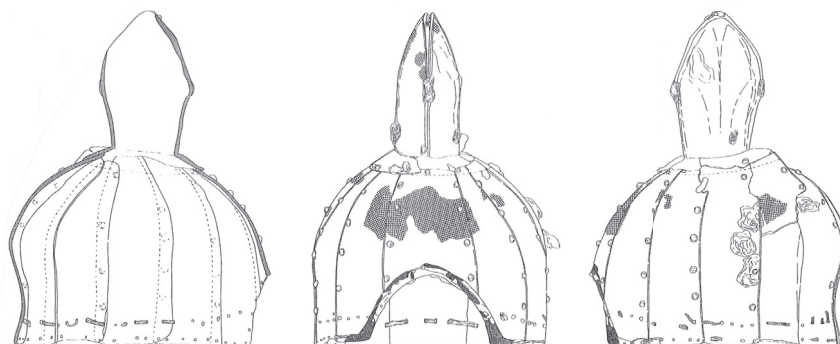
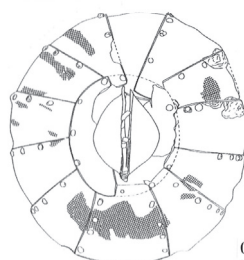


図4 冑

上：磁县湾漳北朝壁画墓（中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所 2003）  
中・下：綿貫観音山（群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）

領した製品の一部を、「新羅調」などとして倭国に再分配したものであろう。こうして得た中国製品を倭王権は上毛野の豪族に分配したものであると思われる。つまり再分配のさらに再分配となる。

ところで何故倭王権は上毛野の豪族に、このような優品を分配する必要があったのだろうか。かつて指摘したように、上毛野の豪族は軍事氏族としての性格を持っており、舒明9年(637)には上毛野形名が蝦夷征討の将軍に任じられて戦地に赴いた話が『日本書紀』に記載されているが、その中に「先祖は海を渡って彼の地を征服し、武勇を後世に伝えた」との記述が見られる。また天智2年(663)3月には上毛野稚子が百済救援軍を率いて派遣された6将軍の一人として選任されている。しかし稚子以外の将軍は、すべて後の「畿内」出身者である(間人連、巨勢神前臣、三輪君、阿倍引田臣、大宅臣)。倭王権側が上毛野氏の軍事力を高く評価し、しかも同氏を信頼していたことを裏付ける事実であろう。こうしたことから、王権は上毛野氏に対し、新羅から得た優品を分配したものと考えられるのである。なお、上毛野国造の奥津城は前橋市総社古墳群に比定される[右島1994]が、先に見たように6世紀後半の西毛では総社古墳群中の総社二子山古墳や観音山古墳などを盟主として、角閃石安山岩削り石積み石室を象徴とする、首長連合が形成されていたものと思われる。角閃石安山岩削り石積み石室は、この首長連合の中核をなす構成員が共有する墓制であったと思われるが、この外縁にもこれに準じるいわば準構成員がいたであろう(萩原塚古墳の被葬者などを想定している)。これらが擬制的同祖同族としての「上毛野氏」を構成していたものと思われる。そしてそれら各々の構成員に、王権からの分配品をさらに再分配したものであると思われる。

このように考えたとしても、さらなる疑問が生じることを禁じ得ない。そもそも新羅はなぜ上記優品や銅のインゴットを倭に与えたのであろうか(先にも記したように倭の側では新羅からの献上品とみなした)。さて、6世紀後半の新羅は国家建設に忙しく、また仏教寺院の建設などをはじめ倭国に対する「新羅調」「任那調」(これらは発展途上にあった新羅が、倭国との無用の戦闘を避けるために実施されたものであろう)の準備など多くの銅が必要であったに違いない。恐らく中国南北朝への遣使にあたって、中国から下賜された製品の中には多くの青銅製品や銅のインゴットが含まれていたものと思われる。あるいは積極的に銅(製品であれインゴットであれ)入手の請願を行ったことも考えられる。いずれにしても、6世紀中葉以降新羅は飛躍的に発展する国家興隆期にあっており、多くの銅製品や銅素材を必要としたことであろう。その一部が「新羅調」などによって倭国にもたらされたものと思われるのである。こうして、今回の分析結果の中に中国産原料、特にこれまでほぼ未確認であった華北産原料が含まれていることも素直に領けるのである。

なお、資料調査において次の方々のお世話になった。記して感謝いたします。

高崎市教育委員会 若狭徹、藤岡市教育委員会 中島誠、玉村町教育委員会 小柴可信・中島直樹

## 註

(1)——小稿できりいし截石と呼称する石室は、後の「畿内」(以下畿内)の切石石室と密接な関係にあるものではあるが、壁面には明瞭な削り痕をなお残すものであり、ピシャンなどの道具を用いたコタタキなどによって壁面に削り痕がほとんど認められない畿内の切石とはやや異なる(特に岩屋山式石室)ことに留意したい。この点については、旧武蔵国の範囲に分布するいわゆる「切石積石室」も同

様の問題点が指摘できる。特に武蔵の切石積石室は畿内の用語と全く同じ用語(漢字)であることから、そのことに十分留意する必要がある。

(2)——磁器湾漳北朝壁画墓は、発掘調査報告書において墳墓や副葬品の豪華な内容から、北齊の初代皇帝文宣帝(在位550～559年)である高洋陵である可能性が高く推測されている。

## 参考文献

- |       |      |                                                                                                                         |
|-------|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 尾崎喜左雄 | 1966 | 「浮石質紡錘状角閃石安山岩使用石室の研究」『横穴式古墳の研究』吉川弘文館, pp.387～470。                                                                       |
| 高田貫太  | 2014 | 『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館, pp.1～363。                                                                            |
| 田中良之  | 2015 | 「古人骨からよみがえる甲を着た古墳人の姿」『よみがえれ古墳人～金井東裏遺跡から発信された1,500年前のメッセージ～』よみがえれ古墳人 東国文化発信委員会, pp.168～172。                              |
| 土生田純之 | 2006 | 「群馬県における積石塚古墳の諸相」『古墳時代の政治と社会』吉川弘文館, pp.325～359。                                                                         |
| 土生田純之 | 2009 | 「古墳時代後期における西毛(群馬県西部)の渡来系文物」『三国時代青銅遺物鉛同位元素を利用した産地推定研究』国立中央博物館, pp.23～35, 翌年以下の文献に再録された。『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集, pp.181～190。 |
| 右島和夫  | 1993 | 「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30集下, pp.1109～1142。                                                                         |
| 右島和夫  | 1994 | 「総社古墳群の研究」『東国古墳時代の研究』学生社, pp.212～265。                                                                                   |

## 【発掘調査報告書】

本文の行論にとって特に不可欠の古墳(遺跡)は、主として以下の報告書に依拠した。

井出二子山古墳

2003 『井出北畑遺跡：井出地区遺跡群』群馬町教育委員会(清水豊他)

2009 『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳』高崎市教育委員会

お榛名古墳(お春名古墳)

1997 『群馬町誌資料編Ⅰ 原始古代中世』群馬町誌刊行委員会(若狭徹)

諸口Ⅲ号墳

1985 『諸口遺跡Ⅲ』群馬町教育委員会(飯島克巳他)

稲荷塚古墳

1985 『藤岡市遺跡詳細分布調査Ⅳ 神流地区』藤岡市教育委員会(奥平一比古)

堀ノ内BK-1号墳

1982 『F<sub>15</sub> 藤岡平地区遺跡群』藤岡市教育委員会(前原豊他)

東平井古墳群時沢支群K-5号墳

1996 『F<sub>15</sub> 藤岡平地区遺跡群』藤岡市教育委員会(寺内敏郎)

皇子塚古墳

1989 『皇子塚古墳 範囲確認調査報告書Ⅳ』藤岡市教育委員会(志村哲)

萩原塚古墳

1989 『白石古墳群調査報告書』(藤岡市史資料編別巻)藤岡市(尾崎喜左雄)

小泉大塚越3号墳

1993 『小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会

小泉長塚1号墳

2006 『小泉長塚遺跡』玉村町教育委員会(長井正欣他)

綿貫観音山古墳

1998 『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 
- 1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山王二子山（金冠塚）古墳  
1982 『金冠塚（山王二子塚）古墳調査概報』前橋市教育委員会  
石原稲荷山古墳  
1981 『石原稲荷山古墳』高崎市教育委員会  
三ッ寺Ⅰ遺跡  
1988 『三ッ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社  
下芝谷ッ古墳  
1988 「群馬県下芝・谷ッ古墳」『日本考古学年報』39（1986年度版）日本考古学協会（田口一郎）  
北齊・磁县湾漳北朝壁画墓  
2003 『磁县湾漳北朝壁画墓』中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所  
北齊・庫狄廻洛墓  
1979 「北齊庫狄廻洛墓」『考古学報』1979第3期（王克林）

この他、群馬県内の各古墳については、上記報告書の他、以下の文献も全般的に参照した。

- 1981 『群馬県史 資料編3』群馬県  
1999 『新編 高崎市史 資料編Ⅰ 原始古代Ⅰ』高崎市  
1993 『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』藤岡市  
1999 『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社

（専修大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2018年1月15日受付，2018年6月4日審査終了）

---

## The Lineage of Bronze Products in Kamitsukeno during the Kofun Period

HABUTA Yoshiyuki

Artifacts from multiple Japanese tumuli (kofun) in the Seimo region were subjected to lead isotope ratio analysis. The tumuli analyzed included some from the latter half of the 5th century (Ide Futagoyama Tumulus: raw materials originating in the Korean Peninsula) and from the first half of the 6th century, but the majority belong to the latter half of the 6th century to the early 7th century. Furthermore, most of those contain chambers of carved, piled stones of amphibole andesite. This stone chamber is considered iconic of the burial practices of the alliance of chiefs in the Seimo area, as represented by the Watanuki Kannonyama Tumulus and Soja Futagoyama Tumulus. Especially in the Kannonyama Tumulus, copper water jars and Chinese iron helmets thought to be made in Northern Qi, a Northern Dynasty of China, have been found, along with many items made in Silla. Silla products have been found among artifacts from other chambers of carved, piled stones of amphibole andesite. The academic world had struggled to interpret this apparently contradicting fact, as it had been thought that Wa had constantly been at odds with Silla while carrying on a good relationship with Baekje. However, the writer theorizes that these derive from “Sillaesque” and “Mimanaesque.” In particular, there was a gilt bronze crown made of raw materials originating in North China among the artifacts from Koizumi Nagatsuka Tumulus No. 1 analyzed for this study. Like Wa of the time, Silla did not have much raw copper materials, and the writer theorizes that Silla used raw materials procured in some way from the Northern Dynasty, to which it had sent many envoys, crafted the articles, and conveyed “Sillaesque” and other styles to Wa. Of course, the articles are not assumed to have been brought directly to the alliance of clans in the Seimo area, but they are assumed to have been brought to the Wa government then redistributed and brought to the land of Seimo. Seimo played a vital role in activities on the Korean Peninsula and in battles against the Emishi, and entries in *Nihon Shoki* (*Chronicles of Japan*) show that this was highly valued by the Wa government. As has been related, we can peer into the international affairs of the time through artifacts from chambers of carved, piled stones of amphibole andesite in Seimo from the latter half of the 6th century to the early 7th century.

The fact that the copper used in artifacts from Ide Futagoyama Tumulus has a high probability of having originated in the Korean Peninsula is consistent with the circumstances of the time (mainly interaction with Gaya and Baekje).

Key words: tumulus, Seimo region, lead isotope ratio analysis, Korean Peninsula, Baekje, Silla, Gaya

---